

私たちは、礼拝をする時、蝋燭をつけます。大体礼拝の5分前には蝋燭をつけて、それから、おしゃべりをやめて、静かにするように、と教えられています。それに加えて、クリスマスを迎える降臨節には、祭壇の蝋燭のほかに、4本の蝋燭に灯す火の数が一週ごとに増えて行って、今日の昼間の礼拝では、4本全部つきました。また、今夜は、私たちみんなが、自分の手にも蝋燭を持って礼拝しています。

みなさんは、もう蝋燭を灯すことの意味は、聞いたことがあるでしょうが、改めて考えてみましょう。私たちは、教会で礼拝をする時、いつも、蝋燭に火をつけています。

祭壇のどちらからつけますか？右ですか、左ですか？

礼拝で祭壇の蝋燭に火をつける時は、右に先につけます。それでは、消す時はどうでしょう。左から消して、最後に右を消します。

これは、祭壇の上にある祈禱書を照らすのが、先ず第一の目的だからだと私は思います。礼拝で、祈禱書は向かって右側に置く伝統があります。私が子どもの頃は、司祭は壁に向かって立ち、礼拝の途中で、福音書を読む前に、右の祈禱書を左に移しました。そして聖餐式でパンとブドウ酒をみんなが飲み終わると、祈禱書はまた左から右に戻されて、祝福をして、終わりました。今はずっと右側にあります。

礼拝の最初に祭壇の祈禱書を照らし、最後までその祈禱書を照らすために、右から火をつけて、右の蝋燭を最後に消すだろうと、私は思っています。そして、礼拝学に詳しい先生にそれを話すと、それ以上の理由は聞いたことがない、と肯定してくださいました。

そして、ついでにその先生が話してくださったのは、元々は祭壇には何も置かないで礼拝は始まった。現在大きな礼拝をする時、行列を作って先頭に十字架と二本の蝋燭をサーバーたちが運んでいるが、元々は、祭壇の上に置く十字架と蝋燭が最初の行進で運ばれて、祭壇に安置されるところから始まったということです。

話をもとに戻すと、蝋燭の火は、何よりも、先ず暗い所を照らす役割のために使われるものです。聖書の初め、創世記第1章1節から5節。

『1:初めに、神は天地を創造された。2:地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3:神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。4:神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5:光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。』

神様は、世界を造るのに、最初の日には世界が闇に覆われていた時、「光あれ。」と言って、光を創造されました。

礼拝の初めに、蝋燭に火を点すのは、この神様の天地創造から始められた、聖書に心を向けることが第一です。日曜学校などで、昔は「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えなさい。」という言葉が、式文に出てきました。いつも、礼拝の最初に蝋燭に火がついたら、「神様が世界を造られた。そして私も造られた。」ということのを思い出しましょう。

その他に、今月は、礼拝堂の正面に4本の蠟燭を置いています。これは、クリスマス案内にも書いていますが、イエス様が生まれるまでの、聖書の歴史を思い出させるものです。

1本目は、約束の蠟燭。ユダヤ人たちの先祖アブラハム、その子のイサク、またその子のヤコブなどイスラエルの族長と言われる人々に対する神様の約束を思い出すためです。

イエス様よりも2000年。今から言えば4000年位前、アブラハムという人がいました。神様は、アブラハムに、自分の家から出て、神様の示す地に行きなさい。あなたの子孫を通して、世界を祝福しよう、と言われたのです。結局その子孫の中に、イエス様がいます。アブラハムは、知らない土地へ、神様の言葉を信じて旅に出ます。そのアブラハムに語られた約束を思い出すために、1本目の蠟燭がつくのです。

さて、アブラハムから1000年くらい過ぎて、イスラエルにはダビデとかソロモンの有名な王様が出てきました。そしてその頃には、預言者と呼ばれる人々も出てきて、神様からの言葉を人々に知らせる仕事をしていました。

特に、人々が間違った生き方をしていると、「神様は悲しんでおられるよ。間違った道を歩まないで、正しい生き方をしなさい。」と言いつけました。そして、イスラエルが他の国に滅ぼされたり、他の国の植民地になったりした時も、「やがて、救い主がやってくるから、希望を持って待ちなさい。」と励ましたのです。

この預言者たちのことや、彼らの語った言葉、聖書を思い出して点すのが、2番目の、預言者の蠟燭です。この日は、聖書の日曜日とも言われています。

そして3番目は、イエス様より先にこの世に来た、洗礼者ヨハネ。4番目は、イエス様を体に宿したマリヤさんを覚える蠟燭を点します。これらは、すべて、イエス様の誕生を期待しての蠟燭でした。

そして、クリスマスには、最後に5本目の蠟燭を点す教会もあります。

ヨハネによる福音書の1章9節から10節までを、以前の口語訳聖書で読んでみましょう。

『9:すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。10:彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。』

イエス様を光にたとえていて、その誕生で5本目の蠟燭を灯しているのです。

そして、イエス様ご自身も、ヨハネによる福音書8章12節で、『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ』とされています。

私たちが礼拝で蠟燭をつけるのは、世の光であるイエス様を迎えるため、という言い方もできるでしょう。

12月のこの時期は、イスラエルでも大変寒い季節です。都のエルサレムに雪が降る時もあります。とても羊飼いが野宿しながら、羊の番などできない季節です。

ですから、クリスマスをイエス様の誕生日と考えるのは少し違っていています。誕生日ではなく、イエス様の誕生を記念し祝う日、というふうに受け取るのが正しいのでしょうか。

それでは、どうしてこの時期にクリスマスを祝うのでしょうか。

それは、キリスト教が北ヨーロッパに伝えられたことと関係があります。

北ヨーロッパでは冬になると、昼の長さがとても短くなってきます。それで、太陽がまた戻ってくるように、と太陽を神様のように礼拝する信仰がありました。しかし、太陽は神様が造られたものです。

そこで教会は、そんな太陽崇拝をする人たちにキリスト教を伝えるために、この時期にクリスマスを祝うようになったといわれます。空に照る太陽が神様なのではない。私たちに正しく導き、照らして出さる、本当の太陽。義の太陽であるキリストこそが私たちに救うのだ、ということをお教えるために、冬至を過ぎた頃を、イエス様の誕生を祝う日に決めたのです。

陽の長さが短くなるこの季節こそ、人々に希望の光をもたらす、イエス様を祝うのに一番相応しい時期だということです。

私たちは、イエス様の誕生を、蝋燭の光を点すことで祝いますが、それだけで終わることなく、私たちが人々に光をもたらす、イエス様の弟子として働くことが大切でしょう。

今年も11月の終わり頃から、喪中のハガキが来ています。私個人としても、何人もの世話になった人々が今年亡くなりました。悲しみの中にある喪中の人々が、年賀状を出さない、というのは喪中の習慣のある日本では当然かもしれません。そしてそれに呼応して、こちらでも年賀状を出さない、ということも習慣になっています。

しかし、そんな喪中の人に私たちは何かできることはないだろうか、と考えるのが親しい者の行う行動のように思います。

もう亡くなった司祭ですが、喪中の人にはクリスマスカードを出すことにしている、と言われて、私もそれに倣うようにしています。クリスマスイブの今夜、「クリスマスカードを出しましょう」というのは、遅すぎる話です。しかし、ひっそり正月を迎える人々に、改まった季節の便りを出すことが、喪中のハガキを受け取った者の行うべき応答ではないか、と思います。

イエス様は、マタイ5章16節で、『あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。』と教えています。

イエス様の光を受けて、悲しみの中にある人々に光をもたらす者に成長したいと思います。